

1月5日 マタイによる福音書2章13～20節

「おめでとうございます！！」

今、奥羽教区の多くの教会は教会学校を行っていません。そもそも教会学校が存在しない教会や、「誰も来ないから今は休止している」という教会がほとんどで、毎年集計している教会学校の生徒数は、奥羽教区のほとんどの教会で「ゼロ」となっています。この「ゼロ」という悲しい数字を見るたびに、ゼロから何かを始めることの難しさを痛感します。

イエス様も、先週の説教で少し触れたように、洗礼者ヨハネによって洗礼を受けて公の生涯が始まったその時、イエス様がメシアであると信じる人がいない状態から、ゼロからのスタートでありました。イエス様が生まれて、それがメシアの誕生であると示されたにもかかわらず、誰も信じることなくイエス様は育つことになります。先週その理由として語ったのは、イエス様の誕生が「メシア誕生にしては華々しさに欠けていた」という理由でした。そこにいたのは普通の小さな赤子だった、だからこそそれがイスラエルの民を勝利へと導くメシアの誕生であるとはなかなか信じられませんでした。ただ、イエス様がそう信じられなかった理由はそれだけではありませんでした。それが今日の個所で示されている、イエス様がメシアであると信じられなかったもう一つの理由である、「ヘロデ王による虐殺」であります。

この出来事によって、少なくともヘロデ王と博士のやり取りを知っていた人々にとって、メシアは「既に死んだ」と理解されたことでしょう。念入りに、絶対にメシアを殺そうという執念によって行われた幼児の虐殺によって、おそらくはイエス様の誕生に駆け付けた羊飼いたちも感じたことでしょう。それほどまでに、「幼子の皆殺し」は、効果があったことだと思います。だからこそ、イエス様は完全にゼロの状態から、ご自分のことを宣べ伝えるために、宣教の歩みを始めることになります。

そう思えば、殺された子どもたちやその家族にとってはたまったものではありませんが、ヘロデ王の所業さえも神様によって用いられて、イエス様が十字架につくまでの道のりが整えられていた、と考えられるのかもしれませんが。神様が何もない所から世界を作り上げたように、イエス様を信じる人もゼロから始まり、今この瞬間、私たちにまでその福音が伝えられているのです。それほどまでに、神様の業が確かにこの世に働いていることが示されているのです。

今日の説教題は、あけましておめでとうございますという意味の「おめでとうございます」ではありますが、よく見るとビックリマークが二つ付いた、とても元気の良い「おめでとうございます！！」という言葉でした。私たち大人であれば、ここまで威勢のいい言葉を叫ぶことはなかなかありませんが、もし今ゼロの状態から将来的に教会学校が生まれて、子どもたちがこの教会であふれることになるのであれば、きっとそこには元気いっぱいの、力いっぱいの「おめでとうございます」の声が響くのではないのでしょうか。神様の業が確かにこの世に働いている、そのことを知っている私たちは、ゼロから天地のすべてを創造した、全てを生み出した神様であれば、ゼロから始めてこの世に自分のことを示したイエス様の力があれば、それが可能なのだと確信することが出来ます。そして、私たちがここに、今までできなかったことを成し遂げるそのことによって、神様の業をこの教会に、この江刺の地に成し遂げることが出来るのです。その希望によって強められながら新しい一年に向けて、共に歩みだしていきましょう。

今日の説教箇所：マタイによる福音書 2 章 13～20 節

- 13:博士たちが帰って行くと、主の天使が夢でヨセフに現れて言った。「起きて、幼子とその母を連れて、エジプトへ逃げ、私が告げるまで、そこにいなさい。ヘロデが、この子を探し出して殺そうとしている。」ヨセフは起きて、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトへ退き、ヘロデが死ぬまでそこにいた。それは、「私は、エジプトから私の子を呼び出した」と、主が預言者を通して言われたことが実現するためであった。さて、ヘロデは博士たちにだまされたと知って、激しく怒った。そして、人を送り、博士たちから確かめておいた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯にいる二歳以下の男の子を、一人残らず殺した。その時、預言者エレミヤを通して言われたことが実現した。「ラマで声が聞こえた。激しく泣き、嘆く声が。ラケルはその子らのゆえに泣き慰められることを拒んだ。子らがもういないのだから。」ヘロデが死ぬと、主の天使が、エジプトにいるヨセフに夢で現れて、言った。「起きて、幼子とその母を連れ、イスラエルの地へ行きなさい。幼子の命を狙っていた人たちは、死んでしまった。」